

松浦家文書の戦時疎開について

話し手 松浦一雄

聞き手 鈴江英一

日時…一九九八年五月八日（金）午後二時より

（約一時間）

場所…国文学研究資料館別館会議室

話し手…松浦一雄氏（松浦武四郎より五代目の子孫）

聞き手…鈴江英一（国文学研究資料館史料館教授）

同席…吉岡栄美子（同 情報閲覧室事務官）

〔 〕（ ）…補足箇所

【目次】一、戦時疎開聞取の動機

- 二、関東大震災のとき
- 三、疎開の実行
- 四、疎開先での保存と再疎開
- 五、戦後の移動、史料館への寄託
- 六、グマツウラ、かグマツラ、か

一、戦時疎開聞取の動機

鈴江「今日はわざわざお越しいただきまして有り難うございます。私は、史料館にまいりまして五年になりますが、以前は北海道立文書館におりました。「北海道に居たときには」松浦武四郎翁は幕末の探検家、北海道の名付け親として、歴史上の人物として親しい存在でした。史料館に来て初めて松浦武四郎文書の原本を見ることが出来ました。史料館でお預かりしている史料は、約八百点の史料が二つのロッカーの中に納められています。」

今回、松浦家文書の戦時疎開のことをお聞きしようと計画したのは、二年ほど前になりますか、丸瀬布町（北海道）の秋葉実さん（松浦武四郎研究家）が来られて、松浦「二雄」さんと一緒に話したときに、松浦家文書の戦時疎開のことが出て、この文書を今日まで伝えることに、そんな努力があったのかと、初めて知らされたのがきっかけです。一度、寄託された松浦さんご本人から、まとまったお話を聞きしたいと思っておりましたが、延び延びになっていました。今年になっていろいろご連絡して、松浦さんにも調べていただき、今日のようなことになったわけで



松浦武四郎翁（松浦家文書より）

すが、最近、ほかにも史料の戦時疎開の話を知ることがあります。日本郵船会社のこととか、史料管理学研修会のレポートに宮内庁書陵部史料の疎開をテーマにしたものもありまして、これは松浦家文書のことでも早くうかがって置かねばと思ったわけです。

そういうわけで、今日は戦時疎開のことを、お話いただくわけですが、その前にお話いただく松浦さんご自身のご経歴からうかがいたいと思いますが、いかがでしょうか。」

松浦「はい。私は、昭和十年に東京の神田五軒町で生まれました。父が武彦、母がタミです。私は長男でした。十七年に練成国民学校に入りまして、次の年、二年生の二期の終わり頃に、栃木県の佐野に疎開し、植野国民学校に移りました。昭和二十三年三月に小学校を卒業するまでそこにおりました。中学・高校・大学は東京です。当時、品川区大井北浜川町に住んでいました。現在の目黒に移ったのは、昭和三十六年十月です。

大学は昭和三十五年に卒業しました。大学が薬系で、味や香りに興味がありましたので、最初に、菓子材料問屋でインスタントコーヒーを作る会社に入りました。ですけども、そこは自由化で、工場の方が解散してしまったものですから辞めて、昭和三十七年に曾田香料という香料の会社に入りました。ほとんど研究部におりまして、新製品の食品香料の配合割合を決める調査研究をやって、定年まで勤めました。ですからこういう歴史的な話は関心がなかったというか、やっていた仕事とそうとうに離れているのですから「うまく話せないかも知れません」……。」

鈴江「そうですね。そういうご経歴の中で、まあ、松浦家文書については、——松浦武四郎翁の稿本とそれを木版にした版本が中心と思いますけれども——、私どもはとも史料自体に目がいってしまって、松浦家ではどのようにして、武四郎翁の没後保存してきたかというあたりのことは、ついつい見落としがちであったと反省もしておるのですが、そのあたりのことからお話し下さいませでしょうか。

松浦武四郎翁のなくなられた年代というのが、明治二十一年、一八八八年と思いますが、それからもう百年以上経っているわけですね。」

松浦「百年ちよつとくらいになりますか。」

鈴江「そうですね。」

二、関東大震災のとき

松浦「たぶんこういつた史料を散逸させないで、ちゃんと保管、保存といいますが、それをしなければいけないと思つたのは、武四郎から勘定して三代目に当たる孫^{まご}太だろうと思つてですよ。」

鈴江「孫太さんは」おじいさまに「当たる」？」

松浦「私の祖父に当たるわけですね。孫太というのは、孫^{まご}だ^だというので、武四郎が名付けて届出たんだそうですよ。その祖父の孫太さんは、関東大震災に遭いまして「その経験から」、「やはり史料の保存を相当きちんとやつておかなければだめだ、それも一個所じゃない方が良いだろう」と、祖母に言っていたそうです。祖母もそういうことが頭にありまして、戦争が始まつて疎開のことを考えたのだと思います。」

祖父の孫太さんは、大震災前はクロームメッキ工場をもっていました。震災後、メッキ事業を弟の^{いちじろう}二郎さんに譲り、自分はマーケットを作りますが、二年くらいで辞めました。そこに三階建の家を建て乾物を主体にした食料品店を始めました。孫太さんは、昭和九年に亡くなっていますので、私はさきに申し上げましたように昭和十年の生まれなものですから、孫太さんを知らないのですが、関東大震災で武四郎の史料の保存を、相当強く考えていたであろう

と思うんですよ。それに自分で武四郎の字が読めるものですから、今の字に解説して原稿用紙に書いたものを残してまして、それを出来るだけ出版して読んでいただくという意図を持っていたと思うのです。

孫太さんが、武四郎の稿本を解説した原稿用紙が、ミカンの段ボール箱で三つあり、それが叔父の森正もりただしさんの家の倉庫（蔵）に疎開してありました。昭和六十年頃、家の建て替えて蔵を撤去するときに出てきたので、送り返されてきました。これは武四郎記念館で整理していただき、現在まで二つの史料が出されています。孫太さんは、昭和四五年頃から亡くなる迄、その作業を続けていたと聞いております。没後五十年の展示会も、はじめは孫太さんが企画したのだと推測しています。出来るだけ、大勢の方々に武四郎のことを知っていただくと考えていたようですよ。

太平洋戦争の前に、祖父が「武四郎の史料をちゃんと保管しないとだめだ」と言っていたことを、松浦家では強く意識しておりました。戦争になっての史料の疎開ということでは、松浦家としては武四郎のものは一切失わせないで「全部なくさないようにしよう。それが命とイコールくらいの大切なものだ」という気持ちがあつたんですよ。」

鈴江「その震災の話ですけど、震災の時に失われた史料があつたのですか。」

松浦「武四郎の稿本だとかは失われていないんです。それは、私もはっきりわからないんですけど、孫太さんが南葵文庫に見せたらしいんですね。南葵文庫は紀州徳川家ですか、麻布あぶのどこかにあつた……。大震災に遭ったときは、たまたま南葵文庫に置いてあつたのだそうです。松浦は、神田の五軒町におりまして、——そのときはまだ違う町名だと思つてですけど——蔵が焼け落ちたりなんかしました。荷物は、大八車に積んで、孫太の一番下の弟が早稲田わさなの諏訪すわに居るのでその家に運んだのだそうです。

その一番下の弟は、武四郎という同じ名前がついていましたね。その上、よく私なんかには、——私は「一雄」なんですからね——、「俺は、親父の名前を呼んでいるようで、おまえと話すのはいやなんだ」と言っていましたよ。



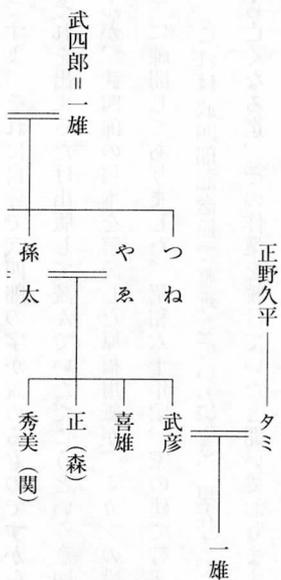
松浦一雄氏

…」

鈴江「あの一、松浦武四郎の跡を継いだ方が一雄さん。同じ名前でいらっしゃるのですね。」

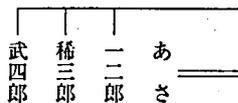
松浦「名前だけでなく、字も同じなんです。『武四郎』の方は、四番目の孫が生まれたときに一雄さんがつけたんだらうと思うんですけども。その武四郎が新宿の早稲田の近くの諏訪におりましたので、そこに行ったようです。あのくらはなれていると、地震の被害もそれほどでもなく、庭に出て、蚊帳を吊って過ごしたそうです。」

【松浦家略系図】



松浦一雄氏作成

徳二



◇松浦孫太(明治十一年三月二日〜昭和九年四月十二日)

◇やゑ(大正七年八月三十日、旧姓金兎)

◇あさ(明治二十年九月十三日〜昭和五十六年四月八日、大正十年十一月五日結婚、旧姓平野)

◇武彦(明治三十八年九月十三日〜昭和二十五年七月二十日)

◇タミ(明治四十五年一月二十一日〜平成七年二月二日、昭和八年五月二十日結婚、旧姓正野)

今生きている叔父、武彦の兄弟が四人いて、そのうちの一人の叔父と話したときに、「大震災のときは、おれは頭に瓦が落ちてきて怪我をしまして、なにも出来なかつたけれども、——小学校四、五年の頃だつたそうです——兄貴は一生懸命、荷物を出して持っていった」と言っていました。」

鈴江「そうすると、南葵文庫に預けたおかげで、史料は助かったのですか。」

松浦「いや。大震災のときでも、武四郎の稿本なんかはもし「松浦に」あつたとしたなら、いちばんの最優先で持出して助けたんだらうと思います。こんどはほかのものが失われていたと思いますけれど。尤も、荷車で出しているんですね、途中で火が着いたりしたかもしれませんが。」

鈴江「そうですね、その教訓が戦時疎開の時に良い影響を与えたんですね。」

三、疎開の実行

松浦「たぶん、そうですね。出来るだけ疎開したほうが良いと、孫太さんは亡くなっていますけれど、父だとかあるいは祖母なんかは、東京で昭和十七年四月に空襲があり、強制疎開も始まったわけで、なんとしてでも、東京に置いておくのは危ないだろうということを間違ひなく考えたと思うんですね。祖母は孫太のあれになるわけですから。」

鈴江「奥様ですね」

松浦「そうですね。あさといひます。ひらがなで「あさ」と書きます。ただ、孫太の子供達は武彦など四人いるんですけども、男の子ばかりです。それは先妻の子供なんです。私も祖母とよんでいるあさといひのは、先妻のやゑさんが子供四人生んで亡くなったものですから、その後妻に入ったひとです。後妻に入ったといひても大正十年に嫁に來ているわけですから、震災にも松浦で遭っています。「震災はほんとうにひどいものだった」と言っていました。」

しかし、保管を頼めるところがほかにないといひので、母の方の祖父が、「そういうものは大事なもんなんだ、世界に一つしか無いような大切なものなんだから、どんなことをしてでも守る」といひて預かってくれることになりました。母は、タミといひますけれど、栃木県の佐野市、その当時は植野村といひたかな、——昭和十八年に佐野市になったのですが——、その正野といひ家から孫太の子の武彦、私の父にですね、嫁に來ていました。母方のおじいさんが正野久平しやうのひさへいさんと申しますけれども、たぶん祖父の意向が相当強くあつて、それで一番安全と思われる正野家の

蔵へ預かってあげると言つて下さつて、疎開したのだと思います。

武四郎の稿本の疎開は、たぶん昭和十七年の終わりか十八年の始めだと思つたのです。私達は、正野家のことを本家と言つていますが、本家の二階の表通りに面した部屋、八畳間が三つくらいありましたかね——、そのどこかの部屋に積み上げていましてね、持つていったものは、史料の入れ物はほとんど全部茶箱でしたよ。茶箱になつて言いますか、武四郎のものは全部、分かるようにして置きました。結局、没後五十年のときに、五十年祭というのですか、昭和十二年に上野松坂屋でやるとき、全部、番号やなんか付けたものですから、それをそのまま踏襲したのだと思います。同じように書いて、パラフィン紙に包んでその上に、むかし小包なんかをこさえたときの、赤っぽい澁紙に麻糸が入つた紙で包んで、紐掛けしてそれからまた茶箱に入れて、それで全部、持つて行つたのです。」

鈴江「茶箱の数はどのくらいなんでしょうね。いま史料館でお預かりしていますのは、ロッカーに入れていますが、ロッカーに二つ分ありますね。」

松浦「ちよつと数は覚えていませんけれど、どのくらいありましたかね、十箱くらいありましたかね。武四郎のもの以外に、あとになつてほんの少しですけど祖母のものとか、私も子供達のおもちゃなんかもですね、茶箱に入れたのではないかと思つています。生活用品などは箆笥に詰めて送つています。はじめ、佐野の正野の本家の二階へちよつとのあいだ置いて、その中から、整理し直して大事なものは、私の記憶では蔵の二階だと思つて、蔵の一番安全な所に場所を作つてもらつて「保存することになりました」。」

鈴江「そうですね。疎開する前には、五軒町とおっしゃいましたか。「史料は」その場所にありましたか。」

松浦「そうですね。」

鈴江「そうですね。疎開した先は、佐野？。佐野さんのお宅は？」

松浦「佐野ですね。うちは、名前は正野といいますが。正しい野原の野。」

鈴江「あ、正野さん。正野家はどのような場所なんでしょうか。農村の一軒家とか?。」

松浦「佐野の、前の地名でいいますと、栃木県安蘇郡植野村というところで……。」

鈴江「植野村?。」



正野家 (現・佐野市内)

松浦「ええ、植野村。その道一つ隔てると、その当時は安蘇郡佐野町というところです。町の行政境界からほんの四軒か離れたところで、村の一番町側にありましてね、昔の街道といえますか、佐野からずつと館林たかやぶしに行く道に面して、両側に自分の家とか家作がありました。隠居所がその道の横の奥に有って、道の前に倉庫がありました。私どもは隠居所を借りてそこに疎開をしていたわけですね。

正野の家というのは油とか味噌とかを製造して、また肥料も商売としてやっておりました。そのほかは地主で、私どもも一回、農家の人がお米を持ってくるのを「見ました」。あのころですから牛車ですか、それに積んで持ってくるのを見ていたんです、番頭さんが「差配をしていました」。もう戦争中になっていましたから、そんなに昔みたいな賑やかさは無いんですけど、なにしろ母の子供の頃は大勢の家族や番

頭だとか、お店の人だとか「がいて、それを」入れたらご飯を食べる人が二十人くらい居たというから、相当大きい「家でした」……。」

鈴江「はあ、それで、東京から佐野家までは、「史料を」という手段で運んだのでしょうか？」

松浦「持つて行ったのですか。たぶん汽車は使わなかったと思います。「手配したのは」たぶん、祖母か、正野の祖父かどつちかだと思ふんですよ。母が生きていればね、どういふふうに運んでどうしたかと言えらんだと思いますが。私にはちよつと申し上げられません。すみませんけれども。」

鈴江「はあ、ただ汽車でないとおしゃつたのはなにか？」

松浦「汽車だったらですね。まず、梱包しなければ送れなかつたと思いますね。私が「正野の家」に行ったときは、「荷物」先に着いたの後に着いたのかはつきりしないのですけれど、着いてそんなに経たないで見たときは、茶箱は嚴重な梱包はされてはいなかつたんですよ。ただ、蓋が開かない程度に封がしてあり、横腹に第何号松浦武彦、片方の方に佐野市、あのころですと植野村、もう佐野市になつていたかな、佐野市赤坂正野久平殿と書いてあつたのです。たしかに正野久平殿と書いたのを、私は小学校に入る前から見ていました。」

そう書いてありますので、宛名書きが佐野市になつていいのか、植野村になつていいのかですね。書いてあるのを見れば、だいたいいつ頃かということが分かります。佐野町から植野村も一緒になつて佐野市に格上げになつたのは、昭和十八年の四月なんです。宛名書きである程度、いつ送つたかといふのか、時期が分かると思ふんです。それから「差し出しが」千代田区と書いてあるか、神田区と書いてあるかですね。⁽³⁾

鈴江「そうですね。いずれにしても戦争の……。」

松浦「最中ですよ。」

鈴江「最中ですね。それも末期に近いそういう時期ですね。」

松浦「そうだと思います。前から考えてはいたんでしようが、整理がつかなかったんですね。」

鈴江「松浦さんのお考えですと、鉄道でなければ、なにか別な手段「がある」とすれば何が考えられますか。」

松浦「トラックだと思っんですよ。」

鈴江「トラック「ですか」。」

松浦「ほかに、ちよつとないと思っんですよ。トラックを頼んで運んだんだろうと思っんですよ。まず武四郎の史料など「を運んだの」が一番最初だと思っんですね。私どもが行つたのが後です。行つてからでもまだ送られてきていました。相当、あわてて送つたとみえてですね、必要なものがすぐ足りなくて、随分生活するのに困つた記憶がありますから。すくなくとも武四郎のものだけは、まず「送る」ということになっていました。」

私が疎開したときは、それらはいっぺんにお蔵に全部入れていたわけではなくてですね「荷物を座敷に広げてあつた」。向こうも「武四郎のものだけは、確実に預かつてあげるよ。後は自分達のは、手で持つてきてもいいし、送つてもいい」と言つてました。武四郎のものはとても手で持つてこれるような量ではありません。「それで」私は、トラックを頼んだのだと思っんですね。どうしてそういうことを言うかという、祖母のお茶の道具だとかお花の道具だとかを、なんとかもう一回運ぶので、トラックを頼めたんですよ。それを全部トラックに積めるようなかたちにしたのですが、「昭和」二十年の三月九日といっますか十日といっますか、あの大空襲で焼けてしまつたわけですね。」

鈴江「ああそうですか。それはもう運び出せなかつたんですね。」

松浦「焼けたときは、出せなかつたのです。祖母は一人で神田五軒町の家におりましたですね、もう、震災のときのこと頭がありましたのでね。バリバリという音で焼夷弾が降つてきたんだそうですよ、雨みたい。それでもうこ

れはだめだと思つて、一目散に上野の山に逃げたと「言うのです」。

鈴江「そうですね。そうすると、史料自体も非常に危ういことだったわけですね。」

松浦「まあ、「大空襲までは」短くみても一年くらいのスパンはあつたと思うんですね、時間的には。「相当時間」差はあつたと思うんですよ。」

「当時、」父は東京に居ました。あのころ戦争中ですから、資材を統制する統制会という時代がありまして、産業機械統制会とかいうのがありました。磐岩機だとかそういう機械の会社を全部まとめて統制してしまして、父の仕事は、戦争後すこしまでその仕事で、東京において「していました」。祖母も東京におりました。私は、母と一緒に「昭和」十九年の二月に、正野の老家、――母の実家なんですけれど、私なんかは正野の老家、老家と言っているんですけれど――、そのの隠居所に疎開しました。子供達と私の母とが疎開したわけです。」

鈴江「そのときは、一雄さんはお幾つでいらしゃいますか?。」

松浦「小学校の二年生ですね。二年生の三学期でした。」

四、疎開先での保存と再疎開

鈴江「しかし、その、良い疎開先があつたということになりますね。」

松浦「母の、おじいさんがね、私の祖父にあたりますが、非常にそういうことに対して理解があつたのです。これは非常に大事なものだ、ということでお蔵に「入れてくれた」。

祖父には、虫干しをしなくてはいけないと、私は言われたですね。藤沢樟脳トビさわしょうのうなどを貰ってやりました。もう戦争末

期で、ちゃんとしたものなんか手に入る状況ではなくなりつつあったのですけれども……。たぶん、正野さんのおじいさんが手配して用意してくれたんだらうと、私は推察しているんです。そうじゃないと、手に入るような状況ではなくなっていましたからね。「祖父は」食べることもよりもそういうことを大事にするという考え方の人でした。私も虫干しを、十月の……」

鈴江「それは、佐野で？」

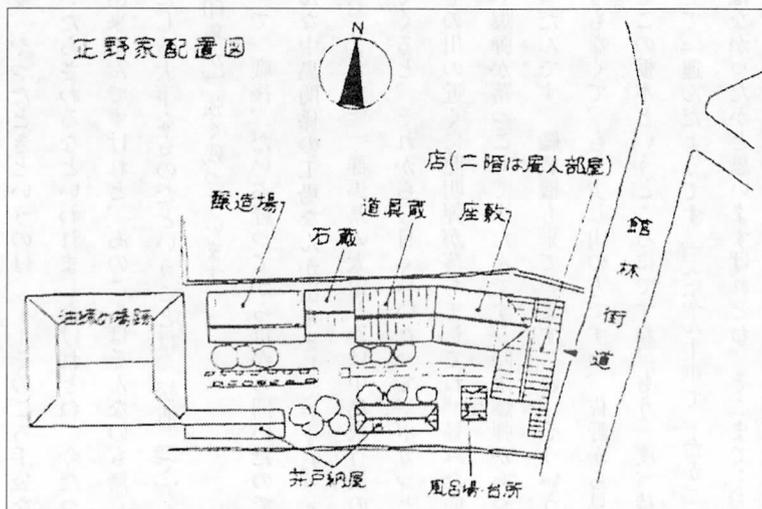
松浦「佐野ですけれど。そう言われて、母と二人だけでしました。「祖父は」下の妹達なんかは、おまえたちは松浦だけでもいいんだと、一人ちゃんと手伝えばいいんだと言って、お蔵から出してきてくれましたね。十畳くらいの客間でお軸やなんかを掛けたり「した」ですね。本を一箱持ってきて、一梱包ずつほどいて広げて、もしシミですか、虫がいたら必ず殺すようにと「言われました」。すくなくとも三時間、十時頃から二時くらいだと思えますけれどもね。そのぐらいの時間ですね、その間、虫がつかないように、来ないように気を付けろだと言われましたね。いろんなことを言われましたよ。」

鈴江「それは、何日か？。一日ですか？」

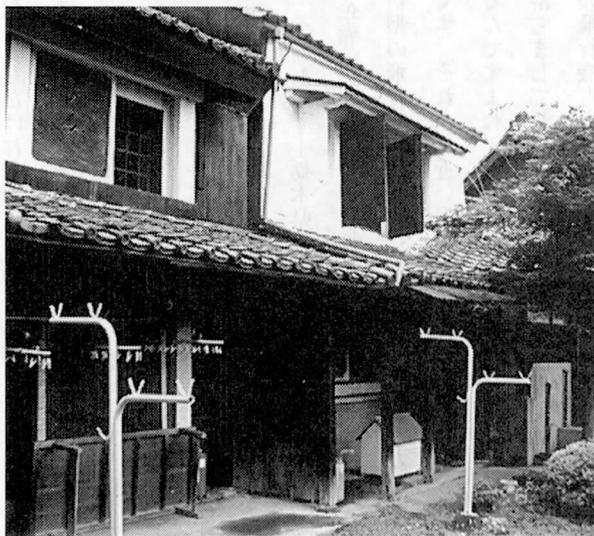
松浦「一日かなんかでは、とても出来なくて、何日かやったのでしようけれども、私は学校の休みの日だけだったんで、そんなにしなかったですけれども。母なんか三日、四日やっていたと思うんですよ。」

鈴江「疎開先で、そんなことがされていたわけなんですね。」

松浦「秋が多かったですけれどね。十月の半ば頃ですね。夏に一回なんだったかわかりませんが、やったことがあります。それは夏休み真っ最中で、なんでやったかという、覚えていないんですけれどね。それ以外は秋ですけど、非常に気候のいいときに「行った。」それで、絶対、陽に当たらないようにと。で、「史料は」お蔵ですから、



「正野家配置図」松浦家文書は、道具蔵に保存されていた。
（日本住宅整備公団『まちとすまい』第40号、1992年9月刊より転載）



正野家の蔵。松浦家文書は、右手の白い蔵で保存された。

上の方に小さな窓があつてほとんど真っ暗で、当時は懐中電灯の乾電池など手に入りませんでしたから、それで薄暗い中からそおと持ち出してきて、——箱をあけて今日は、箱に書いてあるとおり何番から何番まで出してきて——、畳の上につつと並べて、はじめに虫がいない

かを見て、そのあと広げるものは広げないとだめだろうといわれましたけれど、私は本を広げた記憶はないのですよ。夏、やったときというのは、——そのころ手袋なんか貴重品で布のものはありませんでしたから——、手が汗をかいたらさわるなといわれましたけれどね。今だったら、テッシュにアルコールかなんかにつけてすっすっ拭きながら出来るんですけど、あのころはそんなものも無くてずいぶん苦労して、広げたりなんかした記憶があるんですよ。なにしろ大事なものだということは、松浦「で」というより、おじいさんに言われてですけれど。それが私自身には「印象が」強く残っています。

で、戦後、だいぶ経ってから母から聞いたのですけれども、そこも、——栃木県の佐野も——中島飛行機の、いろんな中島関係の工場なんか出来ましてですね。それで、二十年春頃から爆撃にさらされる可能性が高くなってきて「おりました。」群馬県の太田おおたとかは中島飛行機の本拠地で、新型の飛行機が出来るらしいというのがなんとなく入ってくる、それから三日くらいたつて、ボカッとやられるんです。それから近いところに渡良瀬川わたらせが通っていますが、その川の近くに照明弾が落ちましたね。昼みたいに明るくなるんですよ。燈火管制していますし、真つ暗な、そこへ爆弾が落っこちて来たんです。時限爆弾があっちこちちに落ちましてね。学校へ行くのもすごく大変になりつつあったんです。艦載機も来ていますしね。そういう爆撃のための飛行機も入ってきているというので、これはどうしようもなくて、もう少し山の方ですね、佐野から見て北になりますかね、田沼町たぬま(安蘇郡)というところがありまして、その栃本とちもとというところですね、もう一度、持っていった。武四郎の本だけと聞いていますけれどね。牛車に引かせて「運んだようですよ。」たぶん牛車で一台か二台でしょう。それは夏になってといえますから、七月の終わり頃ではなかったかと思えますけれどね。そこまで……。」

鈴江 「それは、何年ですか。」

松浦「昭和」二十年です。四年生のときです。」

鈴江「二十年になってからですか。」

松浦「二十年の五月頃から太田の方に、敵の艦載機も来ますしね、佐野の方も危ない。じゃ再度持つていこうと「なつたようです」。私は、「二十年は」夏休みは十日間しか、八月の十一日から八月の二十日までしかなかったのですよ。十五日の日は出てこいと言われて、結局、実質一週間あつたかなかつたかの記憶なんですけれどね。」

「私は、ほかへ」そんなのを運んだなんて全然知らなかつたです。戦後、母がひよいと言つたのです。栃本というのは、母の一番上の姉の旦那さんが、正野の、——本家とか新宅などと言つてましたけれど——、その新宅を作りましてですね、その旦那さんがその田沼町の栃本から、婚で来ているのです。たぶんそつちの關係の、松本さんとおつしやるのですけれどね。おじいさん、正野久平さんが、なんとか話を全部つけて、持つて行つてくれたのだらうと思いますよ。栃本なら、牛車で運んで佐野までその日のうちに帰つて来れる距離だと思ひます。もうその頃には、頼める男の人ほとんどいませんでしょう。」

それで、終戦になつて、もう大丈夫だというので、また、持つて「歸つて」、正野のお蔵に戻したという……。[その間]二か月位でしようか。」

鈴江「そうですね。おじいさまが、松浦武四郎の記録が大事だというふうにおつしやつてゐるのは、松浦翁の事績を理解「して」、ご存知であつて大事だという「ことを言つておられたのですか」？。」

松浦「そういうことですね。北海道の、ただ名前を付けただけではないんだよ、と言うようなことですね。」

鈴江「そうですね。」

松浦「その前に、たぶん孫太さんといろんな話をされているのでしよう。そのころ松浦「家」はキリスト教で、本郷

の弓町教会ゆまちやうというところの信者でして、孫太さんは教会の役員をやっていたのです。佐野の教会の牧師さんの紹介で母がお嫁に来たのです。「松浦と」母と結び付けたのはそういう関係です。正野久平さんという方も孫太と会ってですね、武四郎のことも知ったんだらうと、私は思います。「戦時中は」孫太さんも亡くなっておりまし、正野久平さんは「お前に言わなくちゃいけないのは、自分だけと思っただけでしょうね。男「に」は言わなきゃしょうがない、というかたちで、「お前は全部聞いてきちんとやっておけ」というわけですね。すこく言われたんですよ。」

五、戦後の移動、史料館への寄託

松浦 「再疎開をやったというのは、多分佐野の老家のおじいさんが手配してやったのだと思います。私ども「昭和」二十三年に、また東京へ戻って来たのです。大井町おおいまちの立会川たちあいかわというところですね。その当時の番地でいいますと北浜川町千四十二番地だったかな。そこに家作が二軒残りましてね。爆弾がすぐそばに落ちて、家は爆風で曲がっていたのですけれど、なんとか一軒の方は人が住んでなくて、浮浪者に近いような人が居て、それをどかしてなんとか根太を直して住んだのですね。」

そこは仮にというつもりで入ったわけですが、仮というわけには行かなくなって……。というのは、父が結核になって寝込んだものですから。それで亡くなる直前まで、そこで寝ていたという状況です。結局、どこかへ移るということが出来なくなりました。まあ、そのときは焼けた神田の土地は更地になっていましたので、そこへ戻るといって気持ちはあつたことはあつたのですが、そんなこともいつていらなくなりました。

父が亡くなったのは、昭和二十五年の七月二十日ですので、東京へ史料を疎開先から戻すことには、タッチしてないのです。」

鈴江「そうすると、正野家から立会川のお宅ですか、そこへ持ってきたのですか。」

松浦「持ってきていたのです。ほんの少しの間ですけれどね。全てではなかったと思いますが、大体は持ってきました。もう、こんな重いものを置いておくとまた二階が下がっちゃうよとか、言っておりましてね。たしかに、下がってしまったのですね。それで、なんとかしなくちゃいけないと言うんで、祖母がものすごくバタバタ預かっていたける所を探してやっていたのを覚えています。父が亡くなってからですけれどね。亡くなる前は、そんなことをやっている余裕がなくて。」

武四郎関係のものもほんの少しは持ってきたでしょうけれど。それは車の関係ですよ。当時は車を簡単に頼める状況でなく、また茶箱などを積めば、米を隠しているのではないかと臨検に会った。トラックにどれだけ積めるかっていうことで、どれを持って来たか記憶にないですけれどね。」

鈴江「お父様が亡くなられたときは、一雄さんはお幾つですか？」

松浦「えーと、一五歳ですか。中学三年です。昭和二十五年ですから、十五歳ですね。」

鈴江「そうしますと、史料館に寄託をいただいたのは、えーと、正確なところをたどりますと、一九五四年度に寄託と史料館の記録になっておりますから、昭和二十九年ですね。」

松浦「二十九年ですね。」

鈴江「二十九年になりますね。なにか、その辺のいきさつで「お話を」。」

松浦「二十七年頃からですね、これじゃ何とかしなくては、ということがたしかにあったんですけれど、わたしども

の考え方からして、自分たちが食べられなくとも史料を売ってという感覚は持っていなかったですね。二十九年は、私は高校の三年生くらいになっていきますかね。ただ、「史料館の人に」もうちょっと前くらいにお会いしているような記憶があるのです。「私が」中学校じゃないことは間違いないですがね。それから、あと一、二年……、一年半くらいは、父が死んで後片づけとかなんか、いろいろがたがたして祖母も困っていましたしね。はっきり申し上げてもう苦しんでました。祖母がだいたい外の仕事をして母が家の中の仕事っていうかたちでやって、ま、なんとか生き延びてきたという状況だったわけです。」

鈴江「史料館が設立されてまもなくのことですね、寄託をいただいたのは。」

松浦「そうです。」

鈴江「たぶん遠藤武^{たどろけし}研究員が、なにか窓口になったというような話が伝わっておりますけれど?。」

松浦「私も遠藤先生にお会いして、それでもうお一人お会いしているような記憶があるのです。祖母が日記みたいにくるくるの紙に今日誰に会ったとか、あれだけは欠かさず書いていました。祖母は、お茶だとか、お花だとか、そういったのをやっています、それを立会川の狭い中でもやっていたわけです。「それで苦しいなかでも」精神的なバランスがとれたんだろうと思うんですけれどね。「日記みたいなものに」お茶だとか、お花だとかがあったとか、ほんとに一行くらい書いていた。「史料館とのこともし書いて」いればですね、二十七年から三十年頃までの間を見れば、何々先生にお会いしたということが、当然一行くらい「ずつ」、自分の心覚え程度の「もの」ですが、「書いてあるはずです。いまの」目黒へ来るときには、持ってきているのですけれど、祖母が亡くなるまでの間に、「それを」一回整理してしまったのかどうか。ちょっと、はっきり覚えていないのですけれど。」

で、「もう一人の」先生のお名前は分からないのです。遠藤先生だけは何回か、お見えいただいている。もうお一

方は、お会いしている記憶は私はあるのですけれど、どなたかはつきり覚えていなくて。申し訳ないのですけれど。」

鈴江「ま、史料館を信頼下さって、お預けいただいたのだらうと思いますけれども。そうでしたか。」

松浦「史料館では」「非常に大切な史料だから、お預けいただければきちんと「管理します」と。そのままにしておいたら虫が喰うのが分かっていましたから。虫干しなんて口でいうのは簡単ですけれど、ものすごく骨の折れる仕事です。どんどん生活が苦しくなっていく、きびしいなかでやっていかねばなりませんので、とてもじゃないけれど「管理出来ない」。それで「史料館からは」あの時たしか三つくらい選択肢をおっしゃっていたのでないかと思えます。それで、「もし、ほんとうに失礼ですが」と、たしかあれは遠藤先生がおっしゃったと思うんですけれど、「買い上げることも可能ですよ」とおっしゃっていたことは間違いないですよ。けれど祖母がですね、「私達の心情としてお買い上げたのではなくて、お預かりいただけられないでしょうか」と「言った。」「預かりで結構だ」と「なった。」そのなかで、無条件に預かるかとか、条件付きの預りとか、また選択肢をお話いただいた。祖母と母と、私も話し合ったという記憶もありますけれど、まあ最終的に、ご覧いただく方が、どういう方でどういうことをご研究になつてゐるか、まるつきり無関心というのもおかしいしというので、ご覧いただくときに、「あらかじめ」ご連絡いただくという「条件にした。史料館では」「それは結構です」というお話だったものでしたからね。「私達から」「そういうことをお願いできますでしょうか」というようなお話をしたのを覚えています。それからずっと預かっていただいているわけです。

ただ、そのときに整理がつかないので、「史料館が」「私どもで、整理してあげますよ」というお話でした。」

鈴江「そんなんですか。じゃ寄託なさったときに寄託契約というのを結びますが、そのときのお名前は当初から一雄さんでいらしゃったのですか。」

松浦「そうです。私も一緒にこちらへ「来ました。」そのときは、現在のこの建物はなくて随分まわりに古い「建物があつて」、これが三井家の文庫なんですよという、そういうところでしたしかお話があつた。ですけれど『きちんと管理出来ますから、それはご安心下さい』ということだったので。私どもも、物資はそのころは相当出回るようになってきていましたけれど、例えば樟脳の純粋なものを、「昭和」

聞き取り風景

二十五年くらいまでは、手にいれるのは相当に骨だったし、樟脳を一つ一つですね、セロハンで包んでいるのを、ちよつと切つてそれに桜紙といいますが、京紙というのですか、——しかも日清紡の漉いたのが一番いいということで——、そんなのを探すというのはですね「難しかった。」とくに昭和一九年から二十三年くらいまでは、普通の者は手に入りませんでした。たぶん正野久平さんが、いろいろと配慮していただいていたのではないかと私は思うのですけれどね。」

鈴江「その寄託なさったときは、まだお若かったのではないのでしょうか、一九五四年、昭和二十九年ですと。もうお幾つになられましたか?。」

松浦「あつ、私ですか。十九になっていますけれど、「昭和」二十九年だとまだ高校です。高校の三年くらいだったかと……。大に「行っていたか」……。いずれにしてもそのくらいの年齢で



す。そうだったのですか、自分の記憶では、「昭和」二十七年か八年の記憶であつたのですけれど。」

鈴江「ああそうでしたか。そうすると、閲覧利用される方が事前に松浦さんのところに、ご了解を得るといふこのことは、それでは当初から……?。」

松浦「当初からですよ。寄託の条件を、こういうこともいいですよ、ああいうことでもいいですよ、といろいろとご教示がありましたので、それで祖母はですね、——祖母が一番長く関係がありましたから、一番骨折つたので、愛着があつたんだらうと思うんですけど——、一応どういふ方が研究をされているか知りたいと「なって、あのような寄託の条件となつた」。

「どんな方がどんな研究を、ということでは、」私個人として記憶に残っているのは、横山健堂先生よこやまけんどうがですね、昭和十三年、——私の記憶は昭和十三年ころまでしか戻れないのです——たしかそのころから昭和十五年くらいまでよく「私どもの家へ」お見えになっていまして、十六年頃もお見えになっていました。「横山先生は」青山の同潤会あおやまどうじゅんかいのアパートにお住みになってですね。私は祖母と一緒に「お宅へ」昭和十五年頃に行った記憶があるのですよ。一回だけですがね。⁽⁴⁾

そういうことで、お見えになっていたのは、その当時、——昭和十年代の中頃では——、横山先生くらいしか、私どもの自宅にはですね、いらっしやらなかつたと思ふんです。

あとは、彫刻でいま釧路くしゅうの公民館に建っていますが、あれは中野五なかのごいち一さんという方の作品ですけれどね。それもやっぱり昭和十五年か六年の始めくらいかな。祖母と二人で中野さんのアトリエかなにかに、見に行つた記憶がございます。それは中野さんという方は、松浦に買い取つて貰いたいということがあつてではないかと思ひます。ただ、祖母が「とても松浦で買えるようなものじゃないと分かつていたたくのには、大変だった」と言っていました。」

鈴江「じゃあ史料館がお預かりしてから、四十年ですね。」

松浦「有り難うございます、本当に。」

六、"マツウラ"か"マツラ"か

鈴江「史料館にとっても、こういう貴重な史料をお預かりしているということは、史料館が史料保存に対する一定の役割を果たしていることになります。お話を伺ってやはり保存される背景というものがあつたんだなということを、改めて伺うことが出来て大変幸せでした。」

あの、最近、没後百年の記念のシンポジウムかなにかの記録が出ていて、その中で、"マツウラ"と読むのか、"マツラ"と読むのかということ、報告なさった方がおられますけれども、松浦家では、やはり"マツウラ"ですか？⁽⁵⁾

松浦「ええ、"マツウラ"ですよ。"マツラ"とよんではいらないと思います。"マツラ"と誰も言っていないし、まあ、あの方なんといつてましたか。大山晋吾おやましんごさんとおっしゃいましたかな。」

鈴江「皇學館大學の方ですよ。」

松浦「皇學館大學ですね。だいぶお若いときからずっと研究されているような……。」

鈴江「あのかたが、卒業論文を書くときに私はお会いた記憶がございます。」

松浦「ああそうですか。私も、北海道でもって一回お会いしていますし、私の自宅でもお会いしてるんで、三、四回くらいお会いしているかもしれません。非常にまじめな……。」

鈴江「ええ、そうですね。」

松浦 「非常にその細かいことまで、調べるんで、それがまあ研究なんでしょうが、私もそれが分からなくてね。そういうお問い合わせがいっぱいあったんですが、いまは大変申し訳ないけれど史料関係ですとこちらで、それからもっとそれ以外の場合ですと、伊勢の武四郎記念館の方へ聞いて下さいとお願ひしているのです。」

鈴木 「今日は大変貴重なお話を伺いました。有り難うございました。」

松浦 「とんでもない、有り難うございました。」

〔完〕

註

(1) 松浦武四郎(二八一八年—一八八八年)は、伊勢国(三重県)一志郡須川村(現、三雲町)に生まれる。若くして諸国の名跡、山岳をめぐっていたが、一八四五年より

蝦夷地(北海道)へ渡り島内を探検、「蝦夷日誌」(初航)三航、「竹四郎廻浦日誌」(東西蝦夷山川地理取調日誌)など多くの紀行、調査書を著す。明治維新後、政府の求めにより蝦夷地に道名・国名を選定する際の意見書を上申し、これにより「北海道」との命名がされた。ついで開拓使判官となったが退官し、余生を全国遊歴と著述で過ごし、七十一歳で没した。史料館には松浦武四郎の稿本、木版本八百七点が寄託されている。史料館ではこれ

を「松浦家文書」として公開しているが、閲覧に当たっては、事前に寄託者である松浦家の了承が必要である(史料館収蔵史料総覧)。

(2) 没後五十年の展示会は、一九三九年(昭和十二)に、東京松坂屋で開催された。松浦武四郎記念館は、一九九四年七月、生地の三重県三雲町に開館した。また、松浦孫太氏の解説本による出版は、佐藤貞夫編「竹四郎日誌 按西扨徒」一―三(一九九六年刊)、「竹四郎日誌 扨徒」(一九九七年刊)、いずれも松浦武四郎記念館発行。

(3) 茶箱の箱書は次の通り。
「栃木県佐野町赤坂 正野久平様 東京都神田区五軒町 三八 松浦武彦」

なお、現在、史料館で保管している茶箱は、六箱である。

(5) シンポジウムの記録は、「シンポジウム松浦武四郎——北

(4) 横山健堂氏は、「松浦武四郎」（北海道出版社、一九四四年

への視覚——」（北海道出版企画センター、一九九〇年刊）。

刊）の著者。

補記

一、松浦家文書の戦時疎開については、秋葉実翻刻・編『松浦武四郎選集』第二巻「蝦夷山海図会」（北海道出版企画センター、一九九七年十二月刊）の「はじめに」二―三頁で若干触れられている。

二、本稿は、次の日程で作成したものである。

なお、本稿とは別に、五月八日の録音テープと素稿及び編集経過資料は、史料館で別途保存している。

- (一) 一九九八年五月八日、聞き取りを実施。
- (二) 五月二十九日、素稿を完成、鈴江から松浦一雄氏へ送付。
- (三) 六月八日、史料館にて松浦氏と鈴江が点検、補足の聞き取りを行う。
- (四) 六月二十九日、松浦氏提供史料と聞き取りの補足を加え、第二稿を完成、再び松浦氏へ送付。
- (五) 七月七日、松浦氏より修正原稿を受領。同日、松浦氏が来館され若干の補足を聴取する。
- (六) 七月九日、第三稿を完成。松浦氏へ再送付。
- (七) 八月二十五日、松浦氏より、正野家写真とも第三稿が返送、受領。完稿。
- (八) 八月三十一日、日本住宅都市整備公団広報課より、「正野家配置図」転載の許可をいただく。

